日本学術振興会 外国人招へい研究者 学術講演会

共催　愛知県立大学地域連携センター
同 国際交流室　同 後援会

題目　“Word classes and syntax in English: interesting problems”
［英語の語類と統語法—興味深い問題点］

日時　2016 年 12 月 7 日（水）
13:00～14:45　講演
会場　愛知県立大学長久手キャンパス S101 教室
通訳　なし

講演者　David M. B. Denison（デイヴィド デニスン博士）
英国学士院特別会員（Fellow of the British Academy）
愛知県立大学客員教授
英国マンチェスター大学名誉教授

デニスン博士は、ケンブリッジ大学で文学士 (優等学位)、文学修士、オックスフォード大学で文学博士を取得後、マンチェスター大学一筋に教育･研究を行ってこられました。氏は、同大学 英語･中世文学スミス教授 (功績ある英語学教授のみに与えられる権威ある職階で、1824 年の前身校創立以来デニスン氏が 3 人目) でもあり、スウェーデン王国ウプサラ市より名誉博士の称号を授与された方でもあります。ブリティッシュ コロンビア大学、サンティアゴ デ コンポステラ大学等の客員教授も歴任し、本年 5 月、本学からも客員教授の称号が授与されました。

主要業績は次のとおりです。*English Historical Syntax: Verbal Constructions* (Longman Linguistics Library). London and New York: Longman, 1993. xiv + 530 pp. | In Suzanne Romaine (ed.). *The Cambridge History of the English Language*, vol. 4, 1776-1997. Cambridge: Cambridge University Press, 1998. (第 3 章 “Syntax” [pp. 92-329] を担当) | *English Word Classes: Categories and Their Limits* (Cambridge Studies in Linguistics). Cambridge University Press. [近刊予定]

講演では、英語の歴史の中で、英語の語類が文法とどのような相互作用を演じてきたかを講じていただきます。基本的に本学英米学科学部生を対象とし、極度に専門的にならないようお願いしてあります。通訳はありません。英語圏の大学の講義で、皆さんがどの程度授業についていけるかを知る絶好の機会となります。しかも、英語の祖国の、英国が生んだ英語史の権威、世界の超一流学者たる方から学べる機会は滅多にあることではありません。私は愛県大一筋 35 年目ですが、皆さんに世界への視野を広げていただきたく、本事業を企画いたしました。外国、特に英国との学術文化交流の架け橋となることを願っています。

■ 聴講希望者は、2016 年 10 月 31 日 (月) までに、電子メールで、件名を「デニスン教授中部地区講演参加」とし、本文に氏名･所属をご記入の上「参加します。」とのみお書きください。電話での照会はご遠慮ください。座席と資料は、事前登録の方を優先します。

■ 申込先および問合せ先　愛知県立大学外国語学部英米学科　中村不二夫（nakamura@for.aichi-pu.ac.jp）

受入研究者　外国語学部英米学科教授 中村不二夫
協力研究者　同所属英語学分野教員　大森裕實教授　石原 覚教授　熊谷吉治教授　森田久司准教授

「日本学術振興会外国人招へい研究者（短期）」学術講演会のお知らせ

マンチェスター大学名誉教授・英国学士院会員・愛知県立大学客員教授

David M. B. Denison 博士

このたび、本学は、「日本学術振興会外国人招へい研究者（短期）」事業第 1 回募集 人文学部門において、全国 5 大学の一つに採択され、英国学士院特別会員・マンチェスター大学名誉教授 David M. B. Denison 氏を招聘させていただくこととなりました。外国人研究者招へい事業の採択は 4 度目で、日本学術振興会に対し心より御礼申し上げます。

招へい研究課題・期間等は次のとおりです。

招へい研究課題：	Aspects of English Historical Syntax and Morphology ［英語史的統語論および形態論の諸相］
招へい期間：	2016 年 11 月 19 日（日）～12 月 10 日（日）〔22 日間〕
受入機関・部局：	愛知県立大学・外国語学部・英米学科
受入研究者：	中村不二夫
協力研究者：	（学内）大森裕實　石原 覚　熊谷吉治　森田久司 （学外）〔関東地区〕秋元実治　中澤和夫〔近畿地区〕菊池繋夫　家入葉子 〔中国地区〕地村彰之　今林 修〔中京地区〕前田 満

デニスン氏は、名古屋大学文学研究科 21 世紀 COE プログラム（2003 年 6 月 6 日 - 8 日、於名古屋大学）「言語テキストの創造と活用に関する国際シンポジウム」招待発表者として初来日されましたが、ご公務が忙しく、巨星の早々の帰国を惜しむ声、氏の再来日を望む声を尻目に、直ちに帰国されました。名誉教授になり時間的余裕が多少うまれたことで来日を快諾された、という経緯があります。このたびの来日では、日本の研究者･学生との交流を心から楽しみにしておられ、本学を拠点に国内 4 ヶ所で講演と研究討議を行います。本学では、3 週間の短期滞在であるにもかかわらず、講演のほか、授業協力も引き受けてくださいました。主な講演日程は次のとおりです（いずれも通訳なし）。

① 11 月 22 日（火）15:00－16:30
関東地区講演 “Aspects of English historical syntax”
於青山学院大学 11 号館 7 階 1172 教室　共催 青山学院大学英文学会

② 11 月 26 日（土）13:30－15:00
近畿地区講演 “English letter-writing: teaching history of English by research”
於関西外国語大学本館 2 階多目的ルーム　共催 関西外国語大学国際文化研究所

③ 12 月 03 日（土）13:00－16:00
中国地区講演 “Some problems in corpus-oriented English historical syntax”
於広島大学霞キャンパス歯学部講義棟 1 階第6講義室　共催 広島英語研究会

④ 12 月 7 日（水）13:00－14:45

中京地区講演 “Word classes and syntax in English: interesting problems”
於愛知県立大学長久手キャンパス S101 教室　共催 愛知県立大学地域連携センター、同 国際交流室、同 後援会

⑤ 個別の学術交流を希望する方のために、12 月 5 日(月) 午後 13:00－16:00（終了予定）を設定しています。

個別学術交流（⑤）を希望される方へ

愛知県立大学の氏の研究室で研究討論していただきます。時間調整のため、ご希望の方は、10 月末日までに受入研究者中村不二夫へ（nakamura@for.aichi.pu.ac.jp）、電子メールでお知らせください。件名欄には「デニスン教授との交流」を、本文にはご氏名･ご所属･ご住所をお書きください。先着 4 名とさせていただきます。

愛知県立大学での学術講演会（④）を希望される方へ

ご覧のように、上記④ “Word classes and syntax in English: interesting problems”［英語における語類と統語法—興味深い問題点］が本学における講演となります。英語の歴史の中で、英語の語類が文法とどのような相互作用を演じてきたかを論じていただきます。この企画は、愛知県立大学地域連携センター、同 国際交流室、同 後援会との共催により実施されます。

この講演のみ、聴衆の主たる対象を学部学生に設定しています。英語圏の大学の講義で、皆さんがどの程度授業についていけるかを知る絶好の機会となります。しかも、英語の祖国の、英国が生んだ英語史の権威、世界の超一流学者たる方から学べる機会は滅多にあることではありません。今後二度とこのような機会を設けることができる保証はありません。どうかこの機会に、多数ご出席ください。私は県大一筋 35 年目ですが、皆さんに世界への視野を広げていただきたく、本事業を企画いたしました。

出欠は、外国語学部英米学科生は、授業を通じて出欠確認が行われますので、担当教授者の指示に従ってください。他学科生、学外の聴講希望者は、次の要領で事前登録してください。電話での照会はご遠慮ください。予告なき参加は拒みませんが、座席と資料は事前登録の方を優先します。

1 .申し込み期限
2016 年 10 月 31 日（月）21:00

2.申し込み方法
直接研究室へ、または電子メールで、件名を「デニスン教授中京地区講演参加」とし、本文に氏名･所属をご記入の上、受入研究者中村不二夫へ（nakamura@for.aichi.pu.ac.jp）お申し込みください。

*******David M. B. Denison 博士のご紹介*******

主要学歴

1973 年 6 月　文学士、優等学位　　ケンブリッジ大学
1976 年 6 月　文学修士　ケンブリッジ大学

1982 年 1 月　文学博士　オックスフォード大学

主要職歴

1995 年 10 月　マンチェスター大学英語学教授（2008 年 11 月まで）

2008 年 12 月　同上 英語･中世文学スミス教授（2015 年 2 月まで）

（功績ある英語学教授のみに与えられる権威ある職階で､1824 年の前身校創立以来 Denison 氏が 3 人目）

2015 年 3 月　同上 英語学名誉教授（現在に至る）

ブリティッシュ コロンビア大学、パリ第三大学、サンティアゴデ コンポステラ大学等の客員教授も歴任

主たる研究歴・受賞歴

1970 年 6 月 ケンブリッジ大学セント ジョンズ カレッジ数学賞受賞

1973 年 10 月-1976 年 9 月 ケンブリッジ大学教育科学科賞受賞

2014 年 1 月 スウェーデン王国ウプサラ市より名誉博士の称号授与

2014 年 7 月-現在 英国学士院特別会員（Fellow of the British Academy）

主要業績

1200 年頃作とされる説教詩 Ormulum の群動詞の研究により博士号を取得した。1999 年までは、態、助動詞 do、語順、非人称動詞、仮定法のような動詞歴史統語論が主たる研究で、その成果は著書 *English Historical Syntax: Verbal Constructions* (Longman Linguistics Library). London and New York: Longman, 1993. xiv + 530 pp. に結実した。10 種の一流専門誌の書評で絶賛され、当初 2,000 冊が完売し 2004 年に再版されるほど広く読まれた。

氏の名声を不動にしたのは In Suzanne Romaine (ed.), *The Cambridge History of the English Language*, vol. 4, 1776-1997. Cambridge: Cambridge University Press, 1998.（第 3 章 “Syntax” [pp. 92-329] を担当）で、238 ページに及ぶ準単著である。この『ケンブリッジ英語史』シリーズはその分野の大家のみが執筆を依頼され、長老に混じり氏は 48 歳の若さで、1776 年から出版の前年までの英語を扱った第 4 巻の「第 3 部統語論」を任された。

2000 年以降になると、動詞以外の歴史統語論・形態論に進出していった。たとえば、限定詞、法助動詞、関係詞を構成するそれぞれのメンバー間の境界が薄れてきた点、SVO^{1}O^2 構造の O^1 と O^2 の順序に起きている変化､本来形容詞または副詞である better が動詞のはたらきをするようになった点を明らかにした。従来の枠では説明できない文法範疇の変化が英語の歴史の中で生じていることを順次実証してきている。原稿は未見だが、書名から、項目を大幅に増やし著書の形に結実させたものがまもなく上梓される単著 *English Word Classes: Categories and Their Limits* (Cambridge Studies in Linguistics.) Cambridge University Press. であろうと判断される。

氏はこれまで、オックスフォード大学出版局、ケンブリッジ大学出版局等の言語学分野の権威ある出版社、*Journal of English Linguistics*, *English Language and Linguistics* 等の一流学術雑誌に研究成果を間断なく発表し、英語史研究に多大な貢献をしてきた。招待講演・基調講演 17 回を含む学会発表数は 89 回、そのうち旅費相手方負担が 28、国際会議・シンポジウム・ワークショップの主催 5 件、共催 11 件という数字も、氏の傑出さを物語っている。氏の発表会場は椅子

が足りなくなり、主催者を慌てさせるのを何度も目の当たりにしてきた。これらの研究を含む諸々の活動により、氏は 2014 年に英国学士院特別会員に推挙された。

このような、英国が生んだ当代きっての学者が、本学を拠点に日本での研究・講演活動をしたいと応諾してくださったことは、この上なく名誉です。そのご研究の一端を、本学でも披露していただきます。

文責　受入研究者　外国語学部 英米学科 教授
中村不二夫（nakamura@for.aichi-pu.ac.jp）